徳島大学総合科学部　人間社会文化研究
第18巻（2010）97－112

ラヴァーター観相学の構想とその問題点

Lavater's Conception of Physiognomy and its Problems

石田 三千雄

はじめに

今日、人間の外面、特に顔からその内面や性格を推理しようとする「観相学」(Physiognomik)という学は、われわれにはまず人相や手相といった事柄に関わる、いかがわしい疑似科学として思い浮かべられるであろう。しかしながら、われわれは日常経験において、無意識のうちに人の外見、特に顔から人の内面を判断していないであろうか。特に、テレビやインターネットで映像が氾濫する現代にあっては、この傾向はより強まっているであろう。

スイスの牧師・説教師であったヨハン・カスパール・ラヴァーター(Johann Caspar Lavater)は、近代において観相学を復興させた人物である。しかし、ラヴァーターが観相学という学を研究するに至ったのは、ある偶然のきっかけにおいてであった。1771年にラヴァーターはたまたまチューリッヒの自然研究協会で観相学について講演することになった。その草稿を、ラヴァーターの友人で医者のツィンマーマンは、ラヴァーターに無断でしかも匿名で1772年に『ハノーヴァー・マガジン』誌に「観相学について」という題名で発表した。これは同年、単行本として出版され、次いで、その第二部がラヴァーター自身によって編集されて出版された。こうして観相学の研究に従事することになったラヴァーターは、主著となる『人間知と人間愛を促進するための観相学断章』全4巻(1775-78)[1]を出版し、近代の観相学の基礎を築くことになった。

ラヴァーターは、彼の観相学全体を、「神は人間を自らにかたどって創造した」(Gott schuf den Menschen sich zum Bilde !)[2]という言葉に代表されるように、キリスト教思想に基づけている。ゆえに、人間の顔は神の姿を宿しているとされ、ラヴァター観相学は全体として神学的な含意を帯びる[3]。われわれはラヴァーターの主要な活動が、衰退する啓蒙に対して、魂の非合理的な諸力を再び発見した、天才の時代に、つまりシュトルム・ウント・ドラングの時代に属していたことに注意する必要がある。そしてラヴァーター自身、ドイツ文学におけるシュトルム・ウント・ドラング運動のもっとも重要な主唱者のうちの一人であった[4]。

---

[1] Lavater, Johann Caspar, *Physiognomische Fragmente zur Beförderung der Menschenkenntnis und Menschenliebe*, 4Bände . Leipzig und Winterthur 1775-1778. ここで使用したのはファクシミリ版である。以下、この著作を『観相学断章』と略記し、本文中でPFという略号を用い、その巻数と頁数を添えて記す。

[2] この言葉は『観相学断章』第1巻の表題の下に掲げられている。

[3] Vgl. Siegrist, Christoh, Nachwort zu "Johann Caspar Lavaters *Physiognomische Fragmente*" (Herausgegeben von Christoph Siegrist, Stuttgart 1984), S.379.

[4] Vgl. Loewenberg, Richard Detlev, Der Streit um die Physiognomik zwischen Lavater und Lichtenberg, in :*Zeitschrift für Menschenkunde*, 9, 1933, S.16.; Siegrist, Christoph, "Letters of the Divine Alphabet"－Vavater's Concept of Physiognomy, in: Ellis Shookman(ed.), *The Faces of Physiognomy: Interdisciplinary Approaches to Johann Caspar Lavater*, Columbia, SC, 1993, p.26.

ところで、観相学はラヴァーターが独自に考案したものではなく、古代以来、ルネサンスを通じて、近代に至るまでヨーロッパ文化史の裏面で連綿と継承されてきた。それがラヴァーターに至って一挙に、表舞台に現れ、18 世紀の多くの著作家たちの心を捉え、賛否両論がヨーロッパ中に巻き起こった。たとえば、それに関連する人びとは、ゲーテ、リヒテンベルク、シラー、レッシング、ヘルダー、ヴィーラント、ムゼーウス、カール・フィリップ・モーリッツなど多数にのぼる。ラヴァーターを通じて観相学は時代の流行の学問となり、彼は名声を得ることになった。ラヴァーターと彼の観相学は変革の時代を熱狂させ、挑発した[5]。

ラヴァーターの観相学は、その主著の表題からもわかるように断片的性格をもっている。そして、それぞれの断章はそれぞれの巻ごとにまとめて「試論」(Versuch)という性格を付与されている。そのことについてラヴァーターは、『観相学断章』の序文で、自分は「観相学、あるいはある種の観相学的体系を記述する気も力ももたなかった」(PF 1: Zugabe zur Vorrede[6])とか、「いかなる全体的なものも形成しない断章のみを提供するつもりである」(PF 1: Zugabe zur Vorrede)と述べている。ジークリストも指摘するように、ラヴァーターは体系家ではなく、熱狂家であり、いつでも中断しうる断片が彼にもっともふさわしい叙述形式である[7]。ラヴァーターは、『観相学断章』で、観相学を一貫した体系的意図で叙述していない。彼は、『観相学断章』に対する批判も受け入れつつ、彼の観相学を絶えず修正しながら、断片的に叙述した。

本論文で、ラヴァーターが観相学という名称でどのような学問を構想していたのか、そしてそこにどのような問題点があったのかを明らかにしよう。その際同時に、リヒテンベルクの批判との関わりで観相学という学の射程と限界も明らかにしたい。

1.ラヴァーター観相学の構想

1.1 観相学の概念とその諸部門

ラヴァーターは『観相学断章』の中で、「観相学」と「観相[相貌]」(Physiognomie)をまず一般的に次のように定義している。観相学とは「人間の外面的なもの(das Aeußerliche)を通じて彼の内面的なもの(Innres)を認識するという技(Fertigkeit)」である。つまり、「直接には感覚されないものを、何らかの自然の表現[表情](ein natürlicher Ausdruck)によって読み取るという技」である。その場合、観相とは、「人間の一切の直接的表出」(unmittelbare Aeußerung)であり、観相

---

[5] Siegrist, Christoh, Nachwort zu "Johann Caspar Lavaters *Physiognomische Fragmente*", S.377.; Cf. Shookman, Ellis, Pseudo-Science, Social Fad, Literary Wonder: Johann Caspar Lavater and the Art of Physiognomy, in: Ellis Shookman(ed.), *The Faces of Physiognomy: Interdisciplinary Approaches to Johann Caspar Lavater*, Columbia, SC, 1993,p.9. グレイによれば、ラヴァーターの言っていることを単に無駄口としてけなし、彼の観相学的観念の明らかな素朴さと単純性をあげつらうことは、ラヴァーターの同時代人に対して抱かれたラヴァーターという人物とその理論のとてつもない魅力を把握することに失敗することになるであろう。正統的なアカデミックな学問分野として一般に受け入れられることを越えて、観相学は近代の大衆文化の最初の広く分散した運動のうちの一つの性格を引き受けた。Cf. Gray, Richard T., *About Face. German Physiognomic Thought from Lavater to Auschwitz*. Detroit, 2004, p.XXX.

[6] 『観相学断章』の序文および序文の付録には頁数が付されていないので、以下、本文中への引用や参照箇所の指示はこのように頁数なしの表記とする。

[7] Siegrist, Ch., Nachwort zu "Johann Caspar Lavaters *Physiognomische Fragmente*", S.384.

学の対象は、「人間の身体の特徴(Zug)、輪郭、受動的および能動的運動、姿勢(Lage)と態度(Stellung)の一切、またじっと動かないでいる(leidend)人間や行動している人間の特徴を直接に知らしめうるもの、彼の人格(Person)を示す一切のもの」(PF 1: 13)である。

次に彼は広い意味と狭い意味で観相と観相学について次のように述べている。最も広い意味で人間の観相とは、「静止している人間や運動している人間の外面的なもの、見かけ(Oberfläche)—それが生身(Urbild)のうちにあるのであれ、何らかの写し(Nachbild)のうちにあるのであれ—」である(PF 1: 13)。それゆえ最も広い意味では観相学とは、「外的なものと内的なもの、目に見える表面と目に見えない内容、生命を与えられた(belebt)目に見え知覚できるものと、目に見えず知覚しえない仕方で生命を与えるもの、目に見える作用と目に見えない力、との関係を知り、認識すること」である(PF 1: 13)。次に、狭い意味では観相とは、顔立ち[容貌](Gesichtsbildung)のことであり、観相学とは「顔の特徴(Gesichtszüge)およびそれの意味を認識すること」である(PF 1: 13)。

さてラヴァーターによれば、人間は、それの各々が特別に観察され、評価される、非常に異なった側面をもつので、非常にさまざまの観相が生じ、きわめていろいろな観相学があることになる。そして人間が種々の特別の側面をもてばもつだけ、それだけいろいろの種類の観相学が可能である(PF 1: 13, 14)。ラヴァーターは、さまざまの観相学の諸部門を構想したが、彼は観相学の体系を構築したわけではない。実際には、それらの幾つかが『観相学断章』のうちで、断片的に述べられているにすぎない。彼が構想した観相学の諸部門は以下のものである[8]。

「人間の形態(Bildung)」、すなわち「均整(Proportion)、輪郭(Umriss)、四肢の調和、姿(Gestalt)」を「釣り合い、美、完全性」の何らかの理想に従って観察し、これらを正当に評価する技、そしてこの判断を人間の主要性格についての判断と結合する技、それは「基礎観相学」(Fundamental-Physiognomik)あるいは「生理学的観相学」と呼ばれる(PF 1: 13f.)。解剖によって、身体の何らかの内部の部分を観察し、「外面性から何らかの内的な性質を推理する技」は、「解剖学的観相学」である。この観相学は「骨、四肢、筋肉、内臓」の観察と評価に携わっている。つまり、「腺、血管や脈管、神経の、四肢の靭帯」の観察と評価に携わっている(PF 1: 14)。「人間の血の混合、体質(Constitution)、暖かさ、冷たさ、不器用や繊細さ、じめっとしたこと[湿度]、からっとしたこと[乾燥]、柔軟さ、神経過敏」を観察し、そこから導き出される「人間の性格についての判断における技」は、「気質観相学」(Temperamentphysiognomik)と呼ばれる(PF 1: 14)。さらに、人間の身体の健康と病気の徴候(Zeichen)の究明に携わる観相学は、「医学的観相学」

---

[8] 『観相学断章』のこれら観相学の諸部門の分類は、1772年の『観相学について』の第二部では、さらに詳細になされている。たとえば、「自然的観相学」、「技術的および学的[科学的]観相学」、「観察的、歴史的あるいは実践的観相学」、「理論的および超越的、あるいは哲学的観相学」、「気質観相学」、「生理学的観相学」、「解剖学的観相学」、「医学的観相学」、「道徳的観相学」、「器用さと熟練の観相学」、「社会的観相学」など。また「骨学的観相学」、「筋肉観相学」、「内蔵観相学」、「腺の観相学」、「管の観相学」、「神経観相学」など。Vgl. Lavater, *Von der Physiognomik*, in: Johann Caspar Lavater, Ausgewählte Werke in historisch-kritischer Ausgabe, Bd. IV, Werke 1771-1773. Herausgegeben von Ursula Caflisch-Schnetzler, Zürich 2009, S.611f., 632ff. また観相に関しても、種々の観相の分類がなされている。たとえば、「男の観相」、「女の観相」、「少年の観相」、「少女の観相」、「子どもの観相」、「家族の観相」、「都市の観相」、「田舎や農民の観相」、「民族の観相」、「キリスト教徒の観相」、「回教徒の観相」、「異教徒の観相」など。Vgl. Lavater, a.a.O., S.620f.

である(PF 1: 14)。外的な徴候に基づいて究明を行い、人間の善と悪の心術と力を働かせる、あるいはそれの影響を受ける観相学は、「道徳観相学」である(PF 1: 14)。その形態(Bildung)、姿、色、運動を通じて、要するにその外的なもの全体によって認識されうる限りでの人間の知力(Geisteskraft)に携わる観相学は、「知能観相学」(intellectuelle Physiognomik)である(PF 1: 14)。

さらに、ラヴァーターは観相学の研究を行う観相学者をも分類している。ある人間の外的なものによってわれわれが抱く第一印象に単に従って正しく彼の性格について判断する者は、「自然観相学者」である。彼にとって性格である、種々の特徴、外面性を明確に認め秩序づけることを心得ている人は、「科学的観相学者」である。これらのしかじかに規定された特徴や表現の根拠、これらの外的結果の内的原因を規定することができるのは、「哲学的観相学者」である(PF :1 14)。

1.2 観相学的感覚、学としての観相学、身体と美の調和

ラヴァーターは『断章』の第1巻で、幼少期より顔に対する関心をもっていたことを打ち明けている。「･･･幼少期から私は素描することに対して、特に肖像を素描することに対してきわめて強い傾向をもっていた･･･。素描することによって、私の曖昧な感情は、しだいにいくらか展開し始めたのであり、人間のもろもろの顔の釣り合い、特徴、類似性や類似性のなさが私により目立つようになった」(PF 1: 8)。

観相を行うこと(人の顔を見て、その人を判断すること)自体は、ラヴァーターによれば、日常的に誰もが行っていることである。それは観相学的感覚によってなされる。「すべての人間は、彼らすべてに眼があるように、何らかの程度の観相学的感覚(physiognomischer Sinn)をもっている。われわれが白と黒を熟考することなく、一目で区別するように、どの人間も熟考することなく、抽象することなしに、ただちに一目で、たくさんの善き人相[顔貌]と悪しき人相を、賢明な人相と愚かな人相を区別する」(PF 4: 118)。ラヴァーターはさらに次のようにも述べている。「すべての人は例外なく観相学的な感覚をもっている。つまり観相学的な予感能力(Ahndungsvermögen)をもっている。子どもはそれをもっている。もっとも馬鹿な人もそれをもっている。愚か者もそれをもっている。動物もそれをもっている。昆虫もそれをもっている」(PF 4: 118)。そして、ラヴァーターによれば「この感覚はすべての生物を互いに結びつける絆(Bond)である」(PF 4: 119)。

さて「観相学の研究」において重要な役割を果たすのも、やはり観相学的な感覚[センス](Sinn)であり、感情である。しかし、ラヴァーターは、それは本来、天才がもつ感覚であると考える。学[科学]としての観相学の研究は、ラヴァーターによれば、観相学者、特に天才の仕事だとされる。天才について、ラヴァーターは次のように述べている。「人が学ぶことができず、教えることもできないような結果(Wirkung)、力、行い(That)、思想、感情のあるところ、そこに天才がある」(PF 4: 80)。ここにはシュトルム・ウント・ドラングの天才論が反映されているであろう。ラヴァーターは天才の特徴づけとして、「比類なき力、根源力、力強き愛、借り物でない生来の内面的な魂の活力、創造力、何ものにも逆らうことのできない集中的精神、集中的情熱」

(PF 4: 81)等々を挙げている。そして彼は次のようにも語る。「学び取られたものでないもの、借り物ではないもの、学ぶことのできないもの、借りることのできないもの、深く心に感じるような個性的なもの、真似ることのできないもの、神的なもの、それが天才であり、霊感のごときものが天才であり、すべての国民にも、すべての時代にも天才と呼ばれたし、人間が思考し、感じ、語るかぎりそう呼ばれるであろう。天才はひらめき、天才は生み出す。企てるのではなく、創り出すのである」(PF 4: 82)。

ラヴァーターは、学[科学]としての観相学を構想した。その際、ラヴァーターは、観相学が恣意的に構想された学ではなく、「自然に根ざした真なる学」(PF 1: Vorrede)、「真の、自然のうちに根拠づけられた学」(PF 1: 17)であることを強調する[9]。彼は、これまで観相学と称して「顔の解釈」(Gesichtsdeutung)に関してくだらない事柄が書かれてきたことを嘆いている。観相学のすばらしさは、きわめて無分別でまずいおおぼらに変えられてきた。それは、予言を行う額の解釈(Stirndeutung)や手相術(Chiromantie)と混同されてきた(PF 1: 17)、と。ラヴァーターは観相学を科学として研究するための方策をいくつか試みている。たとえば、顔の輪郭を正確に観察するために、彼は顔のシルエットを収集し、研究した。「観相学はシルエットよりも、信頼でき、否定しがたい客観的な真理性の保証はもたない」(PF 2: 91)、と彼は述べている。また、彼は、「人間の頭の輪郭がより精確に規定されればされるほど、ますます観相学はいっそう科学的にかつ確実となる」(PF 4: 237)、と語り、額の形の計測を行っている(PF 4: 241ff.)。

観相学において、大きな問題が起こるのは、美と道徳に関してである。観相学において、人間の外見と内面が直接的な対応関係にあるとするならば、身体が美しければ、心も美しいということになる。これに関しては、当然ただちに反論が起こるが、ラヴァーターは、身体的美と道徳的美は互いに相伴うという主張を結局は押し通す。このような考え方の根底には、身体的美と道徳的美は手に手をとって進むという、シャフツベリのカロカガチア[善美]の思想があると言われる[10]。ラヴァーターの観相学はその真理性を宗教から引き出していたから、それは道徳的美と身体的美の普遍的調和の観念を含んでいた。彼にとって、この調和は秩序正しい宇宙の表現であったのであり、美しい人間の顔つきは神の鏡であった[11]。

またラヴァーターは、美しいものと完全なものを同等のものとみなし、これを悪しきものに優先させる。「自然研究者、人間観察者は、人間本性の完全性あるいは不完全性を、あるいは同時に両者を扱わねばならないのか。そうは思われない。彼は、彼に起こる一切を観察しなければならず、美しいものを悪しきものと同様に、悪しきものを美しいものと同様に観察しなければならない。しかし彼は美しいものと完全なものにむしろとどまらねばならない。美しいもの

---

[9] ラヴァーターは『観相学について』の中では、観相学を想像された学ではなく、「現実的な学」と呼んでいる。また「自然のうちに根拠づけられた現実的な学」とも呼んでいる。Vgl. Lavater, Von der Physiognomik, S.557ff., 611.

[10] Shookman, Ellis, Pseudo-Science, Social Fad, Literary Wonder: Johann Caspar Lavater and the Art of Physiognomy, p.3. カッシーラーによれば、シャフツベリにおいて、善、完全性、真理および美は、認識ならびに現実のあらゆる可能性の基礎にある同一の支配的な現象をさまざまの面から言い表しているにすぎない相関概念である。Vgl. Cassirer, Ernst, *Freiheit und Form; Studien zur deutschen Geistesgeschichte,* Berlin 1918, S.133.

[11] Zelle, Carsten, Soul Semiology: On Lavater's Physiognomic Principles, in: Ellis Shookman(ed.), *The Faces of Physiognomy: Interdisciplinary Approaches to Johann Caspar Lavater*, Columbia, SC, 1993, p.57.

と完全なものを自らに対して、および他者に対してむしろあらかじめ描いて見せ、分析しなければならない。美しいものを知っている人はおのずから悪しきものを知るようになるであろう。しかし、悪しきものを知っている人は、それだからといって美しいものをいつでも知っているわけではない」(PF 1: 39)。

1.3 ラヴァーター観相学の射程とその拡張の可能性

われわれはここでラヴァーター観相学の射程とその拡張の可能性について考えてみたい。その際、ラヴァーターの『観相学断章』の出版に協力したゲーテの思想にも留意しておきたい。ゲーテはラヴァーターの『観相学断章』の形成に協力し、その原稿に目を通し、その一部に加筆している。注目すべきは、ゲーテが観相学の拡張を主張していることである。たとえば、ゲーテは『観相学断章』の第１巻の第２断章の付録[ゲーテの加筆部分]で次のように観相学の拡張の可能性について述べている。ここでゲーテは、ラヴァーターの言う「人間における外部」が固定されたものではなく、可変的であることを主張している。

「観相、観相学という言葉をまったく広い意味で用いることを、ひとはしばしば断念しえないであろう。この学は外部から内部へと推論する。しかし人間における外部とは何か。おそらく、人間の内的な力やその働きを表わす、人間の裸の形態、無思慮な身振りではない。地位(Stand)、習慣、所有物、衣服、これらすべては人を変容させ、人を包み隠す。これらすべての覆いを通じて人の最も内面的なものへと突き進むこと、そこからその本質へと確実に推理される、自らこれらの疎遠な諸規定の中でさえ確固とした点を見出すことは、きわめて困難な、いな不可能に思われる。しかし安心してもいい。人間を取り巻くものは、人間にのみ影響を与えるのではなく、人間はまた再び自分のものにも反作用し、そして人間が自分を変化させることによって、人間は再び自分の周りのものを変化させる。かくして或る人の衣服と家財道具はたしかに、その性格を推理させる。自然は人間を形成し、人間は自らを作り変え、そしてこの改造は再び自然的である。人間は自分が大きな広い世界のうちに置かれているのを見る。小さな世界が内部に垣根を巡らせ、壁で囲まれる。そして世界は人間のイメージによって飾りをつけられる」 (PF 1: 15)[12] 。

しかし、ラヴァーター自身の思想にも観相学を拡張しうる可能性があったことに注意する必要がある。彼は『観相学断章』のある断片では、観相[相貌]をかなり広い意味で使っている。たとえば、商人が商品を判断するときにその相貌に従って判断するとか、葡萄畑を通る農夫が葡萄の木の相貌によって葡萄の木の状態を知るとか、料理、一杯のワインやビール、コーヒーやお茶の相貌からその善し悪しを推理するとかの例を出しながら、それらを一般化して「自然全体が相貌ではないのか」、とさえ彼は述べている(PF 1: 47ff.)。また「相貌こそ一切であり、一切は相貌である」(PF 4: 187)、とも。しかし、このことは観相学の伝統からすれば、それほど

[12] Goethe, Johann Wolfgang, Beiträge Goethes zu Lavaters Physiognomischen Fragmenten [1775/76]. in Goethe, Johann Wolfgang, *Schriften zur vegleichenden Anatomie, zur Zoologie und Physiognomik. dtv-Gesamtausgabe,* Band 37, München 1962. S.199.

驚くべきことではないかもしれない。ゲルノート・ベーメによれば、ほんらい観相学の伝統は、観相学の対象を人間に制限しておらず、観相学によって動物、植物および総じてすべての自然の存在者(Naturwesen)が語られている[13]。

ラヴァーターは、民族観相や都市観相についても触れている。ここでは簡単にのみそれらについて紹介しておきたい。彼は「民族の性格(Nationalcharakter)と同様に、民族観相(Nationalphysiognomie)が存在するということは、端的に疑いえない」(PF 4: 267)、と述べる。そして次のように述べる。「黒人とイギリス人を比較してみよ。ラップ人とイタリア人、フランス人とフェゴ諸島の住民(Fuegoeser)を比較してみよ。そして彼らの形姿、顔立ち、精神や心情の性格を比較してみよ。これらの驚くべき相違をそもそも認識すること以上に容易なことはない。しかし、それらを学問的に規定することは、時おり非常に困難である」(PF 4: 267)。ラヴァーターはこのように民族の観相を精密に学問的に把握することが困難であることを認めている。そしてこう述べる。「私は民族の知識(Nationalkenntnis)をごくわずかしかもたずまたもつことができないので、私はこの事柄において多くのことをなすことができる、と人は私から期待することはないであろう。それゆえ、たいてい私は、私の代わりに他者に語らせなければならないであろうし、また自分の観察の鋭いところをほとんど提出することができないであろう」(PF 4: 267)、と。ラヴァーターは、「顔に表れた民族的なるもの(das Nationale eines Gesichtes)」(PF 4: 267)をわれわれは認識することを学ぶと語り、「個々の顔がわれわれに、全民族の特徴的なものに対して眼を開かせる」(PF 4: 268)と述べる。例えば、ラヴァーターは次のようにヨーロッパ人を特徴づけている。「私はフランス人をたいていは歯や笑いにおいて認識する。イタリア人を私は鼻や小さな眼、および前に張り出している顎で認識する。英国人を私は額と眉毛において認識し、オランダ人を頭の丸みや柔らかい髪の毛において認識し、ドイツ人を眼の周りや頬にある皺や襞で認識する。ロシア人を私は上へ反った鼻で、また白髪や黒髪で認識する。英国人はごく短い弓形になった額をもっている。すなわち、それらの額はただ上に向かって弓形になっていて、下方の眉毛に対してそれらは柔らかく傾斜しているか直線的となっている。彼らはめったに尖った鼻はもっておらず、しばしば丸くて、どっしりした鼻をもっている」(PF 4: 269)。次にラヴァーターは、「都市観相や場所の観相」について次のように述べている。「あらゆる国(Land)、あらゆる地方(Provinz)、あらゆる都市、あらゆる村はその特別の相貌(besondere Physiognomie)とその特別の性格(Charakter)を、しかもこの観相に明らかにふさわしい性格をもつ」(PF 4: 321)。

ラヴァーターは、リヒテンベルクの批判を受けて、リヒテンベルクの主張する「情相学」(Pathognomik)に言及して、改めて自分の「観相学」を弁護する。ラヴァーターによれば、観相学は「言葉のもっとも制限された意味で、力の解釈(Kraftdeutung)あるいはもろもろの力の徴候学[記号学](Wissenschaft der Zeichen der Kräfte)」である(PF 4 : 39)。それに対して、「情相学」は、「情熱の解釈(Leidenschaftsdeutung)、すなわち情熱の徴候学[記号学]」である。前者は静止している性格を示し、後者は動く性格を示す(PF 4: 39)。観相学は、「人間がそもそも何であるかを

[13] Vgl. Böhme, Gernot, *Atmosphäre. Essays zur neuen Ästhetik*, Frankfurt am Main, S.132.

示し」、情相学は「人間が現在の瞬間において何であるかを示す」。前者は、「人間が何になりまた何にならないか、何でありまた何でありえないかを示し」、後者は「人間が何を意志しまた意志しないかを示す」(PF 4: 39)。前者は後者の根であり幹である。つまり、後者が植えられる土地である。後者を前者なしに信じる人は、幹のない実、土地のない穀物を信じることになる(PF 4: 39)。「観相学は自然研究者と賢者の鏡である。情相学は廷臣や社交家の鏡である。世間の人びとはみな情相学的に読み取り、観相学的に読み取る人は非常にわずかである」(PF 4: 39)。「情相学はうわべを装う術(Verstellungskunst)と闘わねばならない。観相学はそうではない」(PF 4: 39)。こうしてラヴァーターは自分の観相学を、リヒテンベルクの情相学の基礎となるものだと主張する。

ただし、彼は情相学が観相学を補完する役割ももっており、両方の学の研究が必要であることも指摘している。「真理の愛好家にとっては両者の科学は切り離すことはできない。彼は両者を研究し、柔和な人と活発な人における固定して動かない諸部分の観相と、柔和な人と活発な人の柔和さと活発なことを固定した部分のなかで見ることへと達する。彼は額のなす弧にその情熱的な活動の余地を指定する。そしてあらゆる情熱にその居所の額のなす弧を、あるいは情熱を流れ込ますポテンツを指定する。つまり、それの根、主要な背景(Capitalfond)を指定する」(PF 4: 39)。しかし、最終的にはラヴァーターは情相学よりも、観相学を重視した。「すべての巻を通じて、そしてこの著作のほとんどすべての頁で私は、私の読者に、情相学よりも観相学を与えようと努力した。というのも、後者は前者よりもはるかによく研究されているからである」(PF 4: 39)。

2.ラヴァーター観相学に対するリヒテンベルクの批判

ラヴァーターの観相学は多くの熱狂的な支持者を生み出したと同時に、強力な反対者をも生み出した。なかでも、ラヴァーター観相学を痛烈に批判した点で際立っているのが、ゲオルク・クリストフ・リヒテンベルク(Georg Christoph Lichtenberg)である。リヒテンベルクは、ゲッティンゲン大学の物理学者であり、また文学にも広く通じた学者であった。彼は根本からラヴァーターとはまったく別の種類の本性をもった人であった。リヒテンベルクは精密自然科学者として、神学の敵対者であった。彼は啓蒙の意識的な代表者であり、驚くほど多面的な博識家、常識の告知者であり、天才の世紀の一切の熱狂的な非合理主義を嫌っていた[14]。

彼は、1778 年に『ゲッティンゲン携帯暦』の中で、「観相学について、観相学者に抗して、人間愛と人間知の促進のために」[15]という、ラヴァーターの『観相学断章』を意識した題名をもつ観相学批判の論文を書いた。他にもリヒテンベルクは観相学について、自分の私的な覚え書きである『控え帖』(Südelbücher)の中で触れている。リヒテンベルクはラヴァーターの観相

[14] Loewenberg, Richard Detlev, Der Streit um die Physiognomik zwischen Lavater und Lichtenberg, in :*Zeitschrift für Menschenkunde*, 9, 1933, S.27.

[15] Lichtenberg, Georg Christoph, Über Physiognomik; wider die Phyiognomen. *Zu Beförderung der Menschenliebe und Menschenkenntnis*. in: Lichtenberg, Georg Christoph, *Schriften und Briefe*, Band III, München 1972. 以下、この著作集を L: III という略号で示し、この論文の参照や引用はこの略号と頁数で本文中に記す。

学を辛辣に批判したが、彼自身は観相学そのものを否定したのではない。それどころか、フロイも指摘しているように、リヒテンベルクも、ラヴァーターと同様に、生涯の多くの機会に人間の顔の暗示的力によって魅惑されていた[16]。リヒテンベルクは、人びとの顔を眺めることを「私の生涯の主要な仕事」[17]であるとか、「ごく幼いころから、顔とその解釈は私の大好きなことの一つであった」(L: III, 260)、と述べている。

2.1 リヒテンベルクによる観相学と情相学

リヒテンベルクとラヴァーターの間の、観相学をめぐる論争はよく知られている。しかし、リヒテンベルクの観相学批判の真意は単純ではない。彼は観相学という学を成り立たせる、前提となっている条件が妥当かどうか、慎重に吟味している。その上で、彼は観相学を限定的に認め、情相学というこれまでの観相学に代わる新たな意味での観相学を提出しようとした。

リヒテンベルクは、観相学という言葉を「あるかなり限定された意味」に取り、その下に、「もっぱら心の動き(Gemütsbewegung)の一切の一時的な徴候[記号](Zeichen)を除いて、人間の身体の、主要には顔の外的部分の形と性質から、精神と心の性質を見出すという技(Fertigkeit)」(L: III, 264)を理解する。また彼は観相学を「ある人物の顔の変化しない特徴からその性格を推理する技術」(Kunst)[18]とも述べている。これに対して、リヒテンベルクは「情相学(Pathognomik)」という新たな学を提案する。これは段階や混合を含む、「情緒の記号論(Semiotik der Affekten)全体、すなわち心の動きの自然的な徴候の認識」(L: III, 264)である。そして、観相学は一般的な表現のために受け入れるのがよいだろうと、と彼は述べる(L: III, 264)。レーヴェンベルクによれば、リヒテンベルクは、不動の性格の徴候[記号]としての「静態的な観相学」(statische Physiognomik)と対比して、一時的な行為の徴候としての「動態的な情相学」(dynamische Pathognomik)を妥当させている[19]。リヒテンベルクは人間を固定的なものとは考えない。彼は人間の「完成可能性」(Perfektibilität)や「堕落の可能性」(Korruptibilität)を重視する。これらは「まさに人間を形成するもの」であり、「人間を観相学の管轄区域から永遠に排除するであろうもの」である(L: III,269)。

したがって、リヒテンベルクは、ラヴァーターが固定した顔を表わす肖像やシルエットを重視したのに対して、これらを重視しない。リヒテンベルクは、顔の動く部分に特に注目し、ここから顔を読み解こうとする。「情相学的で、恣意的でない運動だけでなく、偽装の恣意的な運動を指示し、数え上げる、顔の動く部分」(L: III, 287)も広範に優先される。リヒテンベルクによれば、性格を表現するのは、肖像や抽象的なシルエットではなく、顔における一連の変化である。顔における情相学的変化は眼にとっての言語であり、この言語にあってはひとは欺かれ

---

[16] Frey, Feigfried, Lavater, Lichtenberg, and the Suggestive Power of the Human Face, in: Ellis Shookman (ed.), *The Faces of Physiognomy: Interdisciplinary Approaches to Johann Caspar Lavater*, Columbia, SC, 1993, p.89.

[17] Lichtenberg, *Südelbücher*, Band II, Herausgegeben von Wolfgang Pormies, München 1968, 608.リヒテンベルクのこの書に関しては、頁数ではなく、断片番号を記す。

[18] Lichtenberg, *Südelbücher*, I, 504.

[19] Loewenberg, Der Streit um die Physiognomik zwischen Lavater und Lichtenberg, S.30.

えない(L: III, 287f.)。このように人間を特徴づけているのは、顔の固定した部分ではなく、絶えず変わる顔の動き、表情である。したがって、「唯一の形から流し込まれたように似ている三人の人物は、微笑し、語り始めると、あらゆる類似性を失うことがありうる」(L: III, 288)のである。

リヒテンベルクは、特に観相学的な思惟の基礎にある推理の妥当性を問題とする。リヒテンベルクにとって、観相学が存在することを証明することは問題ではなかった。リヒテンベルクによれば、われわれは「しばしば近くから遠くを推理し、目に見えるものから目に見えないもの、現在のものから過去や未来のものを推理する能力」(L: III, 265)をもっている。「こうして錫の皿の上の切れ目は、彼が居合わせたすべての食事の歴史を物語り、そして同様にあらゆる地域[地帯](Landstrich)の形、その砂丘や岩の形姿は自然の文字によって(mit natürlicher Schrift)大地の歴史を含んでいる」(L: III, 265)。そこでリヒテンベルクは言う。「われわれがここで主要に語りたい顔の上にわれわれの思想のしるし(Zeichen)や痕跡、傾向や能力が見出される。気候(Klima)や仕事(Hantierung)が身体に押すしるしはなんと明らかではないのか」(L: III, 265)、と。したがって「万物のうちに万物を読み取るこの絶対的な読解可能性(Lesbarkeit)」(L: III, 265)があることは、リヒテンベルクによれば疑われない。だから、われわれは多くの例において、「ある事物の外的なものから内的なものへと推理するのをつねとする･･･。われわれの五感はわれわれにただ表面的なものを示すにすぎない。すべて他のことはそこからの推理である」(L: III, 265)。しかしながら、「まさしくこうして表面を読むことはわれわれの誤謬の源泉であり、多くの事柄においてはわれわれのまったくの無知の源泉である」(L: III, 265)ことにリヒテンベルクは注意を促す。リヒテンベルクは観相学者の行う推理には飛躍があり、それを「彗星の尾から戦争への飛躍よりも小さくはない」(L: III, 276)、と述べる。またリヒテンベルクは、観相家が人物を判断するとき、実はその人物のことをすでに知っていた可能性を示唆している。「観相家は、彼らがまったく知らない人物のシルエットや肖像から判断するとき、誤る･･･」(L: III, 288)。われわれは表面を読むのをつねとするが、その読解には限界があるのである。リヒテンベルクはこの限界をつねに自覚しておく必要性を説くのである。

観相学的な思惟(知覚、推理)の本質をリヒテンベルクは「観念連合」に見る。われわれは或る人を見るや否や、直ちにそこに連想が働き、その連想に従ってその人を判断してしまう。「われわれが或る人を見るや否や、われわれに面識のある、隣人に似た容姿(Figur)が直ちに意識され、そして通例われわれの判断も直ちに規定する、ということはいずれにせよ、われわれの思考と感覚の法則に適っている」(L: III, 283)。この法則が「観念連合」(Ideen-Assoziation)(L: III, 272, 283)である。しかし、えてしてこういった連想に導かれて、われわれは誤ることが多い。「われわれは顔から毎時間判断し、そして毎時間誤る」(L: III, 283)。またリヒテンベルクは言葉と顔あるいはイメージを結びつけるのも連想の働きであることを指摘している。「或る語(ein Wort)は連想を通じてわれわれのうちで顔となり、そして或る顔は或る語となる」(L: III, 285)。このことは、たとえば物語を読んで、その登場人物を思い浮かべたり、都市の地図から都市を思い浮かべることにつながる。「われわれは、われわれが読む物語の英雄たちを、われわれの眼前にいるかのように見るのであり、都市の地図も同様である。私がアメリカの反乱軍の将軍リーの

肖像を見るずっと以前に、私は彼について或るイメージを作っていた」(L: III, 285)。

リヒテンベルクはラヴァーターのように、身体を単純に心の表現とは考えない。たしかに、彼は「卓越した才能が種々の度合いや混合において種々の顔の形を生み出すこと」(L: III, 266)を否定しない。「情相学的なもろもろのしるし(pathognomische Zeichen)は何度も繰り返されると、そのつど完全に消えることはなく、相貌的な印象(physiognomische Eindrücke)を残す」(L: III, 281)。しかし彼は「われわれの身体は魂にのみ帰属しているのだろうか」(L: III, 266)と疑問を呈する。これに対して、身体は、「それのそれぞれの法則に身体が従い、またそれのそれぞれの法則を身体が満足させるにちがいないといった、その中で交錯し合う系列の中での共通の項」(L: III, 266)ではないのか、と彼は述べる。こうしてリヒテンベルクによれば、「われわれの身体は、魂とその他の世界との中間にあり、両者の影響を映す鏡である。それは、われわれの傾向と能力だけでなく、運命の打撃、気候、病気、栄養および幾千の不都合も物語る・・・」(L: III, 266)。こうしてリヒテンベルクにおいては、身体は心と周囲世界との相互関係のうちにあるものとして捉えられている。

リヒテンベルクは世界の不条理性を深く洞察しており、ラヴァーターの楽観主義に反対している。彼はたとえば、こう問う。「なにゆえに、両親の喜びである、希望に満ちた子どもは、両親が彼の助力を必要とし始めたとき、死んでしまうのか。なにゆえに、他の人々は彼らが生まれた後に直ちに死んでゆかねばならないのか」(L: III, 273)、と。この世では、悪なる心が美しい身体に宿り、善なる心が醜い身体に宿ることは稀ではない。そこで彼はラヴァーターに呼びかける。「もし君が世界を作る、あるいは描くとするならば、悪徳を醜く作り、描き、そしてすべての毒のある動物を恐ろしく描きなさい」(L: III, 273)、と。そして皮肉にも自然科学者リヒテンベルクは神学者ラヴァーターに次のようにたしなめる。「神の世界を君の世界に従って判断してはいけない。君が欲するように、君のつげの木を剪定し、そして君の花を理解できる色合いに従って植えなさい。しかし、自然の庭を君の花園に従って評価してはいけない」(L: III, 273)、と。そして、リヒテンベルクはこう結論する。「ここから、観相学に対してひとがキリストの身体から導き出そうとする証明は論駁される」(L: III, 273)、と。

2.2. 観相学の二つの潮流

レーヴェンベルクによれば、ラヴァーターとリヒテンベルクの観相学は、異なった種類の観相学的経験を示していると見なすことができる。これら二人の非常に異なった人間の観相学的経験は、観相学の歴史の二つの主要な潮流を表している。つまり、非合理的な熱狂的解釈と懐疑的な分析的方法を表している[20]。つまり、それは「形而上学的世界観の表現としての非合理

[20] Loewenberg, The Significance of the Obvious, p.676.; Vgl. Der Streit um die Physiognomik zwischen Lavater und Lichtenberg, S.31. ただし、グレイによれば、ラヴァーターとリヒテンベルクとの間の論争を、物理学者リヒテンベルクの合理性と、シュトルム・ウント・ドラングの天才ラヴァーターの非合理的な感情の突発の間の対決として単純化して解釈することには問題が残る。それというのも、この還元的な理解においては、ラヴァーター自身が観相学を啓蒙の伝統における実証主的な経験科学としてあまりにも合理的に考えすぎたという事実が無視されるからである。Cf. Gray, *About Face*, p.XXXV.

性が優勢な直観的な本質観取と、より慎重な、主要に方法的に合理的な、自然科学により緊密に結びつく研究の二つの潮流」[21]である。前者はより総合的であり、より狭い意味で観相学的であり、後者はより分析的で情相学的あるいは身振り的(mimisch)である[22]。彼によれば、ラヴァーターの長所は、心身の相互関係の一般的法則の基礎的経験を選び出し、それに集中することであった。ラヴァーターは体系的に精密な思考を欠いていたために、特有の方法を作り上げることができなかった。彼は生涯を通じて直観的な観察を、粗雑な測定(額の計量)へ、教授しうる規則や方法へ形成しようと努力したが、むだに終わった。彼の根本的な誤りは、彼の非合理的な経験を合理化することができるという信念であった。これに対して、リヒテンベルクの長所は、無節操な群集による観相学の危険や誤用に対する、反対や警告であった[23]。リヒテンベルクは、心の性質、性格および気質を、顔や身体の特徴の配置によって発見しようと主張するラヴァーターの真面目な実践を、危険なほどに素朴で、不寛容で、科学的に弁護の余地のないものと見なした。科学的な根拠を欠いた恣意的な解釈は、彼にとって、知的な不屈の精神を宗教的な非合理性で、健全な推理を空想によって取って代えようとする、不合理な試みと思われた[24]。

われわれはラヴァーター観相学を今日どのように評価しうるであろうか。レーヴェンベルクによれば、ラヴァーター観相学をわれわれが評価しうる点は、「表面の意味、部分すべてにおける全体性、個々の存在者の一回性(Einmaligkeit)の強調」であり、「骨格の意味、横顔の線の強調、筆跡などの特性といったような個別性(Einzelheit)」[25]である。ジークリストは、ラヴァーター観相学の評価しうる点として、ラヴァーターが「人間の顔の全体の印象」を把握したことを挙げている。この「人間の顔の全体の印象」は、身体的・心的統一の中にその「個体的な一回性」を獲得する。それは「個性」の発見である[26]。観相学の危険性として、レーヴェンベルクは次のことを指摘している。責任を伴わない私的な見解が、深い観相学的な天賦の才よりもはるかにしばしば精密な誤りのない叡知として公に発せられるとき、危険が浮かび上がる。そのために、われわれは再三にわたって、リヒテンベルクの警告を発する声を必要とする。リヒテンベルクは観相学に対する深い信頼から、けれども観相学の解読の困難と人間の不十分さを強調する[27]。

3. 終わりに:観相学の現代的意味

われわれは以上の叙述から、ラヴァーター観相学を今日どのように再評価できるかを最後に考えてみよう。ラヴァーターの「学としての観相学」や人間を「神の似姿」として捉える神学的観点はもはや現代では成り立ちえないであろうが、ラヴァーター観相学を新たな観点から再

---

21 Loewenberg, Der Streit um die Physiognomik, S.32.
22 Loewenberg, A.a.O., S.32.
23 Cf. Loewenberg, The Significance of the Obvious, p.676f.
24 Craig, A Rigid Issue: Lichtenberg versus Lavater, p.68.
25 Loewenberg, Der Streit um die Physiognomik, S.31.
26 Siegrist, Christoh, Nachwort zu "Johann Caspar Lavaters *Physiognomische Fragmente*", S.382.
27 Loewenberg, Der Streit um die Physiognomik, S.33.

解釈する道は残されているであろう。その手がかりはラヴァーター観相学自体の中にも見出され、またゲーテによるその拡張の試みやリヒテンベルクの批判の中にも見出されるであろう。上述のレーヴェンベルクやジークリストの指摘から示唆されることは、ラヴァーターは、「人間の顔の全体の印象」を「観相学的感覚」(典型的には天才に委ねられていたとはいえ)という一種の本質観取によって捉え、それによって人間の個性を把握する可能性を掴んでいたということである。たとえば、ラヴァーターは個性についてこう述べている。「人間のすべての顔、すべての形態、すべての被造物は単にそのクラス、性、種によって異なっているだけでなく、その個性(Individualität)によっても異なっている」(Pf 1: 45)、と。リヒテンベルクの情相学は人間の心の動きの徴候を読み取ろうとする、より柔軟な観相学であり、しかも彼は身体を周囲環境との相互関係の中で捉えようとしていた。こういった点を考慮するならば、ゲルノート・ベーメの言うように、ラヴァーター観相学の根本前提ともなっている「内と外、人間の内面とその外観、本質と現出」を峻別し、外から内へと推理するという発想を転換させるとき、別のタイプの新たな観相学が可能となる。これは、内面は隠されているのではなく、外観に何らかの形で現れ出ていることを見て取る観相学となるであろう[28]。ゲルノート・ベーメによれば、観相上の特徴は、現出における性格を感知可能にする産出者として把握される。こうして、彼によれば、観相学は「雰囲気」を読み解く観相学となる[29]。

観相学の根本前提となっている、「内的な心」と「外的な外観[顔、身体]」という二分法が人間の根源的な経験のあり方を表わしておらず、その二分法を克服することによって人間の根源的な経験の現象としての「純粋な表情現象」が見出され、この表情こそが本来、観相学が研究すべき「観相[相貌]」であることを、カッシーラーに従って指摘しておきたい。このことを彼は『シンボル形式の哲学』の第三巻『認識の現象学』の中で明らかにしようとした。ここでは紙数のためごく簡単にのみその概略を述べておきたい。カッシーラーによれば、人間が形成する理論的世界像の根底にはさらにある別のいっそう根源的な意味での世界、つまり「純粋な表情現象」(reines Ausdrucksphänomen)として開示される世界がある。「表情を理解すること」(Verstehen von Ausdruck)は、事物を知ることに先行する[30]。人間の具体的な知覚は、それがどれほど意識的に客観化されようと、表情性格から完全に切りはなされてしまうことはない。具体的な知覚は、対象が全体として現れてくるその現われ方、つまり魅惑的とか威嚇的といった性格、なじみ深いとか不気味といった性格、心なごませるとか恐怖を起こさせるといった性格を捉える[31]。カッシーラーはこれを神話的体験の特徴として論じている。神話的体験の世界は、純粋な表情体験にその基礎を置いている。ここで現実として現存しているのは、事物の総体ではなく、もともと「相貌的な性格」(physiognomischer Charakter)の多彩な豊饒である。この世界は「ある特有の顔立ち」(ein eigentümliches Gesicht)をもっている[32]。また、カッシーラーは『人

---

[28] Vgl. Böhme, Gernot, *Aisthetik. Vorlesungen über Ästhetik als allgemeine Wahrnehmungslehre*, München 2001, S.107f.
[29] Vgl. A.a.O., S.110f.
[30] Vgl. Cassirer, Ernst, *Philosophie der symbolischen Formen. Dritter Teil. Phänomenologie der Erkenntnis*, Darmstadt 1954, S.73f.
[31] Vgl. A.a.O., S.78.
[32] Vgl. A.a.O., S.80.

間論』で、神話的世界が「相貌的性格」をもつこと、神話的世界には情動的性質が入り込んでいて、見られたり、感じられたりするものはみな、特別な雰囲気によって取り巻かれていること、そこでの経験は「相貌的経験」(physiognomic experience)であること、等々について述べている[33]。

観相学の対象を、顔や身体だけでなく、植物、風景などの自然の事物、さらには自然そのものへと拡大するならば、そこに新たな種類の観相学が生じるであろう。アレクサンダー・フォン・フンボルトの「植物観相学」や「風景観相学」はその例である。こうして世界は相貌的にわれわれに現われているのであり、われわれはいまや世界の相貌的現われの中に風景を位置づけるための手がかりを得た。

[33] Cf. Cassirer, E., *An Essay on Man*, New Haven and London, 1944, p.76f.

文献表

邦訳のある文献は訳を参照させていただいた。また邦語論文の中に出てくるラヴァーターやリヒテンベルクの一部の訳を参考にしたものもあることをお断りしておきたい。

ラヴァーターの著作

Lavater, Johann Caspar, *Physiognomische Fragmente zur Beförderung der Menschenkenntnis und Menschenliebe*, 4Bände, Leipzig und Winterthur 1775-1778.

——, *Physiognomische Fragmente*, Herausgegeben von Christoph Siegrist, Stuttgart 1984.

——,*Von der Physiognomik*, in: Johann Caspar Lavater, Ausgewählte Werke in historisch-kritischer Ausgabe, Bd. IV, Werke 1771-1773. Herausgegeben von Ursula Caflisch-Schnetzler, Zürich 2009.

ヒリテンベルクの著作

Lichtenberg, Georg Christoph, Über Physiognomik; wider die Phyiognomen. *Zu Beförderung der Menschenliebe und Menschenkenntnis*. in: Lichtenberg, Georg Christoph, *Schriften und Briefe*, Band III, München 1972.

——, *Werke in einen Band. Aphorismen - Briefe, Aufsätze - Essays,* Hamburg1985.

——, *Südelbücher*. Band I, II und Register, Herausgegeben von Wolfgang Pormies, München 1968.

ラヴァーター観相学およびリヒテンベルクに関係する文献、その他関連文献

Böhme, Gernot, *Atmosphäre. Essays zur neuen Ästhetik*, Frankfurt am Main 1995.

——, *Aisthetik. Vorlesungen über Ästhetik als allgemeine Wahrnehmungslehre*, München 2001.(ゲルノート・ベーメ、井村・小川・阿部・益田訳『感覚学としての美学』勁草書房、2005 年)

Cassirer, Ernst, *Freiheit und Form; Studien zur deutschen Geistesgeschichte,* Berlin 1918.(エルンスト・カッシーラー、中埜肇訳『自由と形式—ドイツ精神史研究—』ミネルヴァ書房、1972 年)

——, *Philosophie der symbolischen Formen. Dritter Teil. Phänomenologie der Erkenntnis*, Darmstadt 1954.(カッシーラー、木田元・村岡晋一訳『シンボル形式の哲学』(三)<岩波文庫>、岩波書店、1994 年)

——, *An Essay on Man*, New Haven and London, 1944.(カッシーラー、宮城音弥訳『人間—シンボルを操るもの』<岩波文庫>、岩波書店、1997 年)

Craig, Charlotte M., A Rigid Issue: Lichtenberg versus Lavater, in: *Bucknell Review*, Vol.38, 1995.

Frey, Feigfried, Lavater, Lichtenberg, and the Suggestive Power of the Human Face, in: Ellis Shookman (ed.), *The Faces of Physiognomy: Interdisciplinary Approaches to Johann Caspar Lavater*, Columbia, SC, 1993.

Gray, Richard T., *About Face. German Physiognomic Thought from Lavater to Auschwitz*. Detroit, 2004.

Goethe, Johann Wolfgang, Beiträge Goethes zu Lavaters Physiognomischen Fragmenten [1775/76].

in Goethe, Johann Wolfgang, *Schriften zur vegleichenden Anatomie, zur Zoologie und Physiognomik. dtv-Gesamtausgabe,* Band 37, München 1962.

——, *Schriften zur Naturwissenschaft.* In einer Auswahl. Herausgegenbenvon Horst Günter. Mitzeichnungen von Goethe, Frankfurt am Main 1981.

ゲーテ、木村直司編訳『ゲーテ形態学論集・動物編』<ちくま学芸文庫>、筑摩書房、2009年

浜本隆志・柏木治・森貴史『ヨーロッパ人相学—顔が語る西洋文化史—』白水社、2008年

Loewenberg, Richard Detlev, Der Streit um die Physiognomik zwischen Lavater und Lichtenberg, in: *Zeitschrift für Menschenkunde*, 9, 1933.

——, The Significance of the Obvious: An Eighteeth Century Controversy on Psychosomatic Principles, in: *Bulletin on the History of Medicine*, Vol. 10, 1941.

森本康裕「言語から画像へ—J.C.Lavater 観相学における言語批判」、『慶應義塾大学独文学研究室研究年報』23号、2006年

——「観相学の影」、『藝文研究』92号、2007年

松村朋彦「バベルの塔とその解体<観相学>をめぐるラーヴァターとリヒテンベルクの論争について」『希土』18号、希土同人社、1990年

岡部雄三『ヤコブ・ベーメと神智学の展開』岩波書店、2010年

Siegrist, Christoh, Nachwort zu "Johann Caspar Lavaters *Physiognomische Fragmente*" (Herausgegeben von Christoph Siegrist, Stuttgart 1984).

——, "Letters of the Divine Alphabet"—Vavater's Concept of Physiognomy, in: Ellis Shookman(ed.), *The Faces of Physiognomy: Interdisciplinary Approaches to Johann Caspar Lavater*, Columbia, SC, 1993.

Shookman, Ellis, Pseudo-Science, Social Fad, Literary Wonder: Johann Caspar Lavater and the Art of Physiognomy, in: Ellis Shookman(ed.), *The Faces of Physiognomy: Interdisciplinary Approaches to Johann Caspar Lavater*, Columbia, SC, 1993.

Zelle, Carsten, Soul Semilogy: On Lavater's Physiognomic Principles, in: Ellis Shookman(ed.), *The Faces of Physiognomy: Interdisciplinary Approaches to Johann Caspar Lavater*, Columbia, SC, 1993.

＊本研究は科学研究費補助金(基盤研究(C))(課題番号 21520017)の助成を受けたものである。